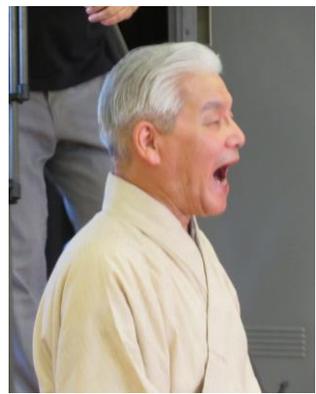


狂言の稽古 開始です (NO.2)

10月12日(木)の3校時から、6年生が、狂言について、発声の仕方や演目(セリフ)について、山口先生から教えていただきました。

子どもたちは、狂言師の山口先生の表現を目の前で体験し、目をキラキラ輝かせていました。



《謡の練習をしました》
ポイントは、口の開け閉めです。稽古の時は、言葉のメリハリを意識し、滑舌の稽古をしましょう。

気持ちが高揚してくると、唄になってきます。力を合わせたり、鼓舞したりすると、今までにないような力が出てきます。例えば、綱引きもそうです。

6年生に一番伝えたいことは、そこにあるからするのではなく、**自分たちで生み出す、自然な感情をつくり上げていく経験**をすることです。

迷った時は、最初の考え方に戻すと、迷いが吹っ切れます。

6年生に特に伝えたいことは、「先輩がやってきたからやるのだ」は、ダメです。「**自分たちから生み出してくる**」を忘れてはいけません。

謡は、口の開け閉めが大事です。

いきなりうまくなるのは、ありえないことです。上手になるには、段階があります。完成したものを観て、真似をしようとすると遠回りになります。





6年生のノリノリ感が、すぐにわかりました。やる気は伝わりました。

『附子』の稽古 始まる



太郎冠者と次郎冠者は、どんな気持ちか動いたかをセリフにのせるといいです。



主人は、真っすぐに前を向きます。30m向こうに、聴かせたい相手がいると思って言葉を発しましょう。

呼びかけは、語尾を上げましょう。

「・・・な[↑]」

『附子』と『留守』を強調します。
言葉は、意味を持っています。**どこに向かって言葉を発するかの意識が大切です。**



間、間、間！

太郎冠者は、次郎冠者を説得するような間を取りましょう。

セリフが観客に届くように話しましょう。

「揚げ、揚げ」「仰ぐぞ、仰ぐぞ」は、リズムよく！

「そりゃのけ、そりゃのけ」を言うまでは、ゆっくりと話します。「そりゃのけ、そりゃのけ」をびっくりしたように、はっきりと話します。

太郎冠者と次郎冠者の2人の会話ですが、遠くに向かって、**観ている人たちに言葉を届けましょう。**

30m向こうにターゲットをおいて、**言葉を届けましょう。**

観ている人は、遠くから観ています。**自分が言っている言葉が相手に伝わるように、ゆっくり話しましょう。**

